引用文献

シュムペーター、ヨーゼフ 1995（中山伊知郎、東畑精一訳）『資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社 .

Bunce, Valerie. 1995. “Comparing East and South,” *Journal of Democracy* 6(3), pp. 87-100.

Diamond, Larry. 1999. *Developing Democracy: Toward Consolidation*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.

Freedom in the World 2008: Selected Data from Freedom House’s Annual Global Survey of Political Rights and Civil Liberties. 2008. Washington D.C.: Freedom House <http://www.freedomhouse.org/uploads/fiw08launch/FIW08Tables.pdf> 2008 年 6 月 7 日時点 .

Lijphart, Arend. 1999. *Patterns of Democracy: Government Forms and Performance in Thirty-Six Countries*. New Haven: Yale University Press.

Migdal, Joel S. 2001. *State and Society: Studying How States and Societies Transform and Constitute One Another*. Cambridge: Cambridge University Press.

（吉川　卓郎　立命館アジア太平洋大学非常勤講師）

James A. Millward. 2007. *Eurasian Crossroads: A History of Xinjiang*. New York: Columbia University Press, xix+440 pp.

ユーラシア大陸の中心に位置し、天山山脈を境として、北にジュンガル盆地、南にタリム盆地を内包する地域は、古来より中国やインド、ロシア、地中海を結ぶユーラシアの十字路として栄え、諸民族の興亡の舞台となってきた。かつて西域の名で知られたこの地域は、18 世紀の清朝による征服以降は「新しく開かれた地」を意味する新疆（Xinjiang）という名称で呼ばれるようになり、現在は新疆ウイグル自治区として国土の６分の１を占める中国最大の省区となっている。

新疆ウイグル自治区の主体民族は、テュルク系言語であるウイグル語を母語とし、スンナ派のイスラームを信仰するウイグル人である。漢族が人口の圧倒的多数を占める中国のなかで、新疆はウイグル人をはじめとするエスニック･グループが過半数を占めるという例外的な状況にあり、民族･言語・文化の多様性という点において他の地域にないきわだった特徴を有している。この 10 年来、新疆はチベットとならぶ中国の民族問題の焦点地域としてたびたび各国のメディアによって取りあげられてきた。最近では、カシュガルやクチャで起こされたウイグル人による事件が報道されたことも記憶に新しい。

本書の著者、James Millward は、アメリカ、ジョージタウン大学の准教授であり、中国および新疆･モンゴル・チベットを含む内陸アジアの近現代史を専門とする気鋭の研究者である。本書は、ユーラシアの十字路として、移民や交易、征服などによる周辺地域との相互作用によって形成されてきた「新疆」の歴史を、学術的かつ包括的に叙述しようとする英語によるはじめてのモノグラフであり、目下、世界的な関心を集める当地域について、その歴史と現状を理解するための格好の書となっている。以下ではまず本書の内容を概観したい。

本書の本論は７章から構成されており、その前後に序と結語が付されている。まず序においては、

現在新疆と呼ばれる地域の歴史を古代から21世紀の現代にいたるまで通史的に描出するという著者の目的が提示されるとともに、本書の歴史叙述をとおして著者が浮き彫りにしようとする3つの主題が説明される。第1の主題は、地中海世界やインド、ロシア、中国をつなぐ東西交渉路の要衝に位置する新疆の仲介者としての役割と、他地域との連関の解明である。第2に著者は、新疆の歴史において繰り返された、北方の遊牧勢力が南方のオアシス住民を支配するという構図がこの地域の地理的要素と密接な関わりを有していることに着目し、検討すべき主題として新疆の地理と環境の果たした役割を掲げている。また近年、新疆の歴史をめぐっては、現代的なナショナリズムの観点、とくに現行の民族的な枠組みをそのまま歴史に敷衍するような議論が数多く見うけられる。著者はこうした傾向に疑問を呈し、各歴史段階においてこの地域の住民がいかなる社会的な組織とアイデンティティを有していたのかということについて、その解明を第3の主題としている。

本論の前半部である第1章から第4章にかけては、古代から近代にいたるまでの新疆の歴史が先行研究を整理する形で概観される。まず第1章「古代における遭遇」では、旧石器時代から8世紀にかけて、周辺地域からの政治的・経済的・文化的な影響を受けながら、シルクロードの中継点として機能したタリム盆地の歴史が概観される。そのなかで、この地域の早期の歴史においては、モンゴル高原やジュンガル盆地、セミレチエに拠点を置く遊牧勢力がタリム盆地のオアシス住民を支配するという構図が繰り返されてきたことが強調される。

続く第2章「中央ユーラシアの興隆」では、9世紀から16世紀にかけて中央ユーラシアを支配した遊牧諸勢力の興亡と、その支配下で発展したオアシス地域社会の様相が描かれる。この時期には西ウイグル王国の樹立がタリム盆地のオアシス住民に言語的なテュルク化を促す一方で、カラハン朝の支配の拡大がイスラーム化を進展させた。このテュルク化とイスラーム化という2つの現象により、タリム盆地の言語的・宗教的な景観が現在のそれに近づいたことが指摘される。

第3章「イスラームと中国とのはざまで」では、まず17世紀までに、ナクシュバンディー教団を中心とするスーフィーの活動によってタリム盆地のイスラーム化が完成するまでの過程が述べられる。次いで、ジュンガルと清朝との抗争の結果、1755年にジュンガル盆地とタリム盆地が征服され、「新疆」として清朝の領土に組み込まれるまでの過程と、約100年にわたる清朝の支配の後に、現地のテュルク系ムスリムの反乱に乗じた外部勢力ヤークーブ・ベグがタリム盆地の支配を確立するまでの経緯が順を追って説明される。

第4章「帝国と民族とのはざまで」では、19世紀の終わりから20世紀のはじめにかけて、清朝による統治を通じて新疆がより深く「中国」内地に結びつけられていく一方で、西方からの思想の流入により、タリム盆地のテュルク系ムスリムが近代的な民族意識に覚醒していく過程が描出される。1878年の再征服と1884年の省制施行以後、清朝は新疆に対する従来の統治を改め、新疆に対する同化および漢化の傾向を強めた。すなわち、新疆に内地と同様の行政を施行し、その主要ポストに漢人を配置するとともに、漢人の移住を推進した。また、テュルク系ムスリムから官僚を育成するために、儒学教育の普及に努力した。このような清朝の統治原則の変化は、清朝による中央アジアへの「中国」拡大の試みと評されている。他方、西方の先進的なムスリム地域の影響により、富裕商人と知識人を主として、テュルク系ムスリムの間で近代的教育普及の機運が高まった。ただし、この教育はウイグル民族としての覚醒を促すものではなく、むしろ中央アジアにおけるテュルク民族の一体性を意識していたこと、またその最終目標も植民地支配からの民族独立を目指すものではなかったことが説明される。

本論の後半部である第5章から第7章においては、20世紀初頭から現代にいたるまでの新疆の

歴史をめぐり、先行研究をふまえつつも、著者独自の研究に基づいた分析と議論が展開される。

第５章「中国とソヴィエト連邦とのはざまで」では、中華民国期（1910 ～ 40 年代）の事件史が、テュルク系ムスリムや漢人支配者など新疆内部の諸勢力の主体的な活動と、中国やソ連をはじめとする外部勢力の影響という２つの側面から分析される。この章でとくに重点が置かれているのは、1933 年と 1944 年にそれぞれ新疆南部のカシュガルと北部のイリで樹立された東トルキスタン共和国についての考察である。今日、これら２つの東トルキスタン共和国は、ウイグル人の活動家によってウイグル民族独立運動のシンボルとして強調される一方で、中国の政府サイドにはイスラーム過激主義と外国勢力の扇動によるウイグル人の分離運動と断じられている。これに対し著者は、先行研究との比較・検討をとおして、これらの運動は必ずしもイスラーム的な政権を樹立するという動機のみから生じたものではなく、近代的な国家の樹立も志向していたこと、また共和国の主体となる民族の定義は一定ではなく、運動が中国支配に対抗する「ウイグル民族」の自決のための戦いではなかったことを結論づけている。先行研究で議論の争点となっている 1940 年代の東トルキスタン共和国運動におけるソ連の役割をめぐっては、著者は共和国に対するソ連の強い軍事的・経済的影響力を認め、アジアにおける戦略的観点から、ソ連が共和国の指導者たちを援助・利用していたとする。

第６章「中華人民共和国において」は、中華人民共和国成立後の 40 年間、すなわち 1950 年代から 1980 年代にかけて起きた政治事件とその影響の分析に充てられる。50 年代の初期には、中国共産党の指導の下で、東トルキスタン共和国の残存勢力の排除、土地改革と集団化、国家による宗教管理、生産建設兵団の建設と漢族の移住促進などの政策が推進された。その一方で、共産党が新疆の特殊な民族構成を考慮し、中国内地の政策の機械的な適用を回避していたことが指摘される。民族認定工作の下で、ウイグル、漢、カザフ、回、キルギス、モンゴル、シボ、オロス（ロシア）、タジク、ウズベク、タタール、満、ダホールを含む新疆の 13 の民族が正式に認定され、1955 年にはウイグル人を主体民族とする新疆ウイグル自治区が成立する。しかし 1958 年に始まる大躍進とそれに続く文化大革命によって中国が階級闘争の時代に入ると、イスラームに代表される民族文化に加え、民族自治そのものも攻撃対象となった。非漢族のポストの削減、ウイグル的な儀式･音楽･服飾の禁止、モスク・マザール・マドラサの閉鎖と破壊などが進められた文化大革命期の象徴的なできごととして、著者は、1970 年前後にはじめて豚という生き物を見た――当時彼らの地方のモスクのほとんどが豚小屋に変えられたことがきっかけであった――ウイグル人の回想を紹介している。文化大革命は中国全土で政治、経済、社会の混乱を引き起こしたが、新疆をはじめとする少数民族地域では民族感情を傷つけ、とくに深い傷跡を残したとする。1978 年以降、共産党は文化大革命への反省から地域自治の再建と強化の方針を打ち出した。1984 年には自治区法が制定されるとともに、経済再建が進められることとなった。この時期の新疆における政策の緩和と中国内地における民主化運動の影響によって生じた、ウイグル人の民族的・宗教的な性格を帯びた反抗のきざしは、1990 年代以降に、より大規模な暴動へと発展していったことが指摘される。

第７章「中国と世界とのはざまで」では、中央主導の投資による開発と新疆経済の回復、近隣諸国との商業・政治的関係の再構築、「西部大開発」にともなう都市化の進展と漢族の大量移住、経済開発と人口増加による環境の悪化、ウイグル人による暴動の激化とウイグル分離主義の国際問題化、多言語教育システムの改革と自治概念の再解釈など、1990 年代から現在（2005 年）にかけて進行してきた現象と傾向が、著者自身のフィールドワークに基づくデータ収集とその分析によって明らかにされる。著者は、1990 年代から 2000 年代にかけての中国中央の新疆に対する同化と漢化

の方向性は、すでに18・19世紀の清朝の時代に決定づけられたものであったとする一方で、この時期の現象はいくつかの点で新しい傾向を含んでいることを指摘している。第1の傾向として、著者は新疆の環境が経済発展を支えうる限界に達しつつあることを挙げ、とくに水資源に関してはその利用の大幅な制限が急務であるとする。第2の傾向として、中国中央による新疆の政治的・経済的な取り込みが他のどの時代よりも強固になっていることを挙げる。著者は、長期にわたって中央アジアに強い影響を及ぼしてきたソ連の消滅が、この地域における中国のプレゼンスを高めたとする。第3の傾向は新疆の国際的な位置づけの変化である。1990年代以降、急速に進展した経済開発と対外開放によって、中国内地と近隣諸国との結びつきを深めた新疆は、一時の政治的・経済的な袋小路の状態を脱し、ユーラシアの十字路として復権することとなった。他方、1990年代の新疆におけるウイグル人の暴動と9・11事件の衝撃は中国政府に新疆政策の見直しを促し、新疆に対する同化および漢化が強化された。このことにより、元々形骸化していた自治のみならず、自治区におけるマイノリティーの権利の保障という前提すらゆらぎつつあることが指摘される。著者は、新疆を取り巻く国際状況の変化が、中国と世界における新疆の位置づけを変えつつあることを述べ、本論を締めくくっている。

結語では、本論の総括にかえて、現代の新疆における3人の著名な人物が紹介される。小売商から身を起こし、一度は商業的・社会的成功を収めながらも政治犯として投獄され、最終的にはアメリカに亡命した「ウイグルの母」ラビア・カーディル。出発点は同様でありながら、新疆有数の企業、新疆広匯集団の長として、毎年フォーブスの長者番付に名を連ねるほどの地位に上り詰めた孫広信。そして、伝統芸能ダルワズ（高所綱渡り）を生業とするウイグル人の一家に生まれ、現在は「中国人の英雄」として数々の綱渡りの世界記録と名声を手にしているアーディル・ホシュール。彼ら3人の半生の物語は、現在の新疆の世相を反映しているようでもあり、非常に興味深い。

以上が本書の大要である。以下では、本書の特徴と意義について、評者なりの若干の指摘を加えることにしたい。

まず特筆すべきことは、冒頭でも述べたように、本書は新疆の歴史を学術的かつ包括的に取り扱ったはじめての英語によるモノグラフであるという点である。新疆史に関する主要なモノグラフとしては、欧米では、著者自身の清朝時代の新疆に関する著作のほか、Forbes、Benson、Kimによる著作［Forbes 1986; Benson 1990; Millward 1998; Kim 2004］があり、また片岡や王柯に代表される日本の研究［片岡 1991; 王 1995］も含め、18世紀中葉から20世紀中葉にかけての歴史的事件の分析と解明という点において顕著な成果を上げている。ただし、より古い時代から、さらには現代にいたるまでの新疆全体の歴史を俯瞰しうるような研究は存在していなかった。新疆の歴史という意味では、とくに中国において、これまでにも数多くの著作が出されてきた。しかしそれらは、新疆における中国支配の正当性の強調、あるいは当地域におけるウイグル人の先住性の主張といった特定の意図の下に書かれたものであり、当事者の歴史認識の分析という意味では貴重な材料になりうるものの、歴史的事実の考察という視点からはかけ離れたものであると言わざるをえない。これに対し、本書はその通史の叙述という性格上、とくに古い歴史の個々の事象の掘り下げという点ではやや緻密さに欠けるきらいがあるが、著者がテュルク系諸語および漢語による現地史料、欧米の諸先行研究、現代中国における学術文献および時事政治資料、現地語史料に基づいた研究に定評のある日本人研究者の論考といった多数の地域・言語にわたる膨大な量の史資料を参照・分析し、研究書として新疆の通史を再構築したことは、それ自体に大きな意義を見いだすことができる。

また本書は、歴史的にきわめて新しい時代に比重を置いていることでも特徴的である。著者は新

疆を含む内陸アジアの近現代史を専門としており、そのことを反映して、本書は通史を取り扱った書でありながら、20 世紀以降の歴史が全体のほぼ半分を占めるという異色の構成を採っている。このうち、とくに著者自身も述べているように、1978 年以降、すなわち文化大革命以降の新疆の歴史の叙述は、内外の研究を含めほとんど初めての試みである。1980 年代から 2000 年代にかけての新疆における共産党の改革・開放政策の推進と民族政策の変化、そして、それにともなう現地社会の変容が、豊富な文献研究と著者自身のフィールドワークに基づいたデータの分析によって体系的かつ詳細に明らかにされたことは、本書に高い学術的な価値を付与している。なかでも、中国中央の新疆に対する同化･漢化の強化と、それに対峙する形でのウイグル人の民族運動の進展という、新疆の歴史のここ 20 年来の傾向が具体的な事例とともに提示されたことは、新疆研究に新たな視点をもたらすものであると言えよう。

本書のひとつの見所は、20 世紀のウイグル人の民族運動の実相とその背景に関する著者の分析である。一般には、ウイグル人の武力をともなう民族運動は 1990 年代から始まったと考えられている。しかし著者は、国際社会が、現地へのアクセスやインターネットを介して新疆の情報を利用できるようになったのが 1990 年代であったというだけで、実際にはすでに 1980 年代にその兆しが見られていたことを指摘している。また著者は、ウイグル人の民族運動が今日の中国政府が断罪するようなイスラーム過激派との関わりのみによって生じたものではなく、その背景には複合的な要因が存在していたことを論じている。６・７章で示唆されているいくつかの要因を整理すると、まず第１に、中国の民族自治概念が当初から問題を抱えていたこと――中国における自治とは少数民族の代表が政府のポストにおいて一定の割合を占めることを意味するに過ぎず、民族の自決権を認めるものではなかった――がある。第２に、著者は 1980 年代の暴動のすべてがイスラーム的と定義できるわけではないということを強調しつつ、文革期のイスラームへの攻撃がイスラームを彼らの文化の核とする意識を高めたことと、1980 年代からの限定的なイスラーム復興の動向とそれに対する政府の取り締まりが、さらなる反発を引き起こした可能性を指摘する。第３に、1990 年代から 2000 年代にかけての改革開放政策が内地の漢族に自発的な大量移住を促し、新疆の各地でウイグル人との経済的･文化的摩擦を引き起こしたことが挙げられる。著者は、ウイグル人のあいだに、政治的・経済的実権が漢族によって握られている名ばかりの「自治」に対する強い不満感情が存在していたことを指摘するとともに、ウイグル人の民族運動の背景には、宗教よりもむしろ彼らの民族としての待遇と生存に関わる問題が存在していたことを示唆している。この問題をめぐってはさらなる検討が必要であるものの、政治あるいはナショナリズムの観点からの議論に終始しがちなウイグル人の民族運動について学術的な分析が試みられたということは、特筆に値すると言えよう。

本書は、新疆の歴史を長いタイムスパンでとらえることにより、各歴史段階における政治、経済、社会の実相のみならず、歴史の流れのなかにおける連続性と非連続性、そして類似点と相違点を浮き彫りにすることに成功している。本書の３つめのテーマとして掲げられた、アイデンティティと社会組織の問題に関しても、各時代の特質がかなりの部分明らかにされたと言えるだろう。それだけに、20 世紀におけるウイグル民族アイデンティティの形成の過程が十分に説明されなかったことが惜しまれる。現在、ウイグル人の間では自らを「ウイグル」と称することはごく普通のことであり、またウイグルという民族が古代から一貫して存在していたとする考え方も一般的である。しかし、このウイグルという名称が、1930 年代から新疆に居住するテュルク系ムスリムを表す名称として公的に使用されるようになった後、どのようなプロセスを経て一般レベルまで定着・深化していったのかということについて知られるところは少ない。著者は 1955 年の共産党による民族識

別工作の際、ウイグル人をはじめとする少数民族は、すでにそれぞれの民族としてのアイデンティティを自認していたとする。しかし、そこにいたるまでの過程についてはほとんど具体的な言及がなされていない。20 世紀の新疆の歴史において、ウイグル人の民族アイデンティティは彼ら自身の民族運動の核をなすものとしてきわめて重要な意義を有している。従って、その定着・深化のプロセスが明らかにされない限りは、著者自身が掲げた課題が十分に達成されたということは難しいだろう。

新疆の近代以降の歴史に関する研究全体に言えることは、各時代における政治事件史の流れやウイグル人の民族運動の様相の研究の進展に比して、彼ら自身の民族アイデンティティや歴史認識など思想的側面に関する研究がいまだ発展段階にあるということである。この問題に関しては、著者以外にも、新免、Roberts、大石、評者らによって若干の考察が加えられているものの［新免 1994; 大石 2003; Roberts 2003; 清水 2007］、史料的制約もあいまって、全体としていまだ端緒についたばかりの段階にあると言わざるをえない。この思想的側面に関する研究とその解明については、新疆研究における今後の課題であると言えるであろう。

こうしたいささかの物足りなさがあるとしても、本書の学術的価値が損なわれることはない。本書の登場により、読者が、古代から現代にいたるまでの長い時間軸に沿って、ユーラシア大陸の東西にわたる広大な地域との関わりのなかで再構築された新疆の歴史を一望できるようになったことを高く評価したい。

参考文献

王柯 1995『東トルキスタン共和国研究：中国のイスラムと民族問題』東京大学出版会 .

大石真一郎 2003「テュルク語定期刊行物における民族名称「ウイグル」の出現と定着」『東欧・中央ユーラシアの近代とネイションⅡ』, pp. 49-61.

片岡一忠 1991『清朝新疆統治研究』雄山閣 .

清水由里子 2007「カシュガルにおけるウイグル人の教育運動（1934-37 年）」『内陸アジア史研究』22, pp. 61-82.

新免康 1994「「辺境」の民と中国：東トルキスタンから考える」溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史（編）『アジアから考える［3］周縁からの歴史』東京大学出版会 pp. 107-141.

Benson, Linda. 1990. *The Ili Rebellion: The Moslem Challenge to Chinese Authority in Xinjiang, 1944-1949*. Armonk, NY and London: M.E. Sharpe.

Forbes, Andrew. 1986. *Warlords and Muslims in Chinese Central Asia: a Political History of Republican Xinjiang, 1911-49*. Cambridge University Press.

Kim, Hodong. 2004. *Holy War in China: The Muslim Rebellion and State in Chinese Central Asia, 1864-1877*. Stanford: Stanford University Press.

Millward, James. 1998. *Beyond the Pass: Economy, Ethnicity and Empire in Qing Xinjiang, 1759-1864*. Stanford: Stanford University Press.

Roberts, Sean R. 2003. “Uyghur Neighborhoods and Nationalisms in the Former Sino-Soviet Borderland: An Historical Ethnography of a Stateless Nation on the Margins of Modernity,” Ph.D. dissertation, University of Southern California.

（清水　由里子　中央大学大学院文学研究科博士後期課程）